




神様の貢ぎ物

とある時代、ある村で
日照りが続いた

村人は雨乞いの儀式を行い、
神に救いを求めた

そして、ひとりの少年が
生贄として捧げられた



A black silhouette of a person with short, dark hair, seen from behind. They are standing against a background of a cloudy sky. The person is wearing a long-sleeved top and pants. The overall mood is contemplative and serene.

神様であるあなたは
少年と出会う

「ええーと、君が貢ぎ物？」

「え、あの、
あなたが神様ですか？」



貧相な体つきの少年が
心細げに僕を見る

どうせ生贄で僕の元に来るなら
成熟した美女が良かった

「あの、神様、お願いです。
どうか村に雨を降らせててください。
作物が育たず川の水も枯れて……
みんなが苦しんでいるんです
どうか助けてください」



そんなの知ったこっちゃない
確かに僕は人間を生み出したけど、
今じゃもう奴らは何もしなくても
勝手に増えていくし
神である僕への感謝も減ってきて
正直人間には辟易している

そんな僕の態度に気づいたのか
少年は涙を浮かべて懇願する

「お願いします……」

俺にできることなら何でもします
だからどうか、村に雨を……」



「へえ？何でもするの？
じゃ……」

僕は悪戯心が疼いた
ちようどいい暇つぶしかもしれない

「僕を満足させることができれば
考えてやってもいいよ」



「満…足…?」

「うん、

難しいことじゃなからよ」

少年と向かい合い
腰の高さになるよう座らせた

「.....」



「ほら、此れ啜えて」

僕は自身の肉棒を少年の前に
突き出した

「あ……」



「何をやるかわかるよね？
できない？」

「やります……!!
でも、あの
神様に触れるなんて、恐れ多くて」

「はは、そんなこと
触らなきゃ
僕を満足させられないよ？」

「あの、では
失礼します……」



「え...」

少年は恐る恐る舌を出し
僕の肉棒にその舌で触れた

ぎこちない動きで
丁寧に舐める

「そうそう、裏側も綺麗にね」

「ふふふふふふ」

「じゃあゆっくり啜えて」

少年は口を開け、肉棒を口に含んだ

「ほら、舌を使って舐め上げて
そして頭を動かして」

「ふ……ん……
ん……」





ん...

ん...
ふ

ふたふた

ふたふた...

ふた

ふたふた



「あはは
甘っちょろい動きだなあ」

「そんなんじゃない僕を
気持ちよくさせられないよっ」

ーガシツ



ゴブ

「ングっ?!」

僕は少年の頭を掴んで
前後に振った



「ほらほら、喉を使って
奥まで咥え込むんだよ」

「んんん！
ふん……！」

少年は僕の言葉に従い
肉棒の根元まで咥えこもうとする

「ん、んぐ、ふ」

涙を浮かべながら
肉棒に食らいついて
頭を前後に振る



「上手上手」

「じゃあ、ほら
ご褒美をあげよう
口を離しちゃダメだよ」



僕は少年の頭を押さえつけながら
精液を少年の口の中にぶち撒けた


「んんん!?!」

突然口の中に広がった液体に戸惑い
どうすればいいのか
わからないようだ



「ゆーっくり口を開けて、僕のを離して
そしたら、全部飲み干して」





従順な少年は液体が溢れないよう、
そろりと口を開け
そして口内に溢れる精液を
大切そうに飲み込んだ

ーコウン…



はあ...

「ふふ、偉いね
よくできました」



「ん……はあ……」

少年は甘い声で深く息を吐いた